

しやり、藻くすにからまるれば取り上げつ。ひとゝ興に入り、花のゆくゑを慕ひては流れを追ひて下り行けり。いかなる線か、われる亦何とやらん氣にかゝれば彼の「哀縁」の事也。思ひ出でさすがに捨てがたく、流るゝ花を打ちまどり、われを忘れ。人を忘れ、天地を忘れ、自然の児となりてわらべと共に行く程に流れはやがて白浪高き海の中に没する處まで來りぬ。追ひ来りし花は流れと共に轉び入るよと見へしが、打ち寄する浪に彼方へ持ち去られ行くに、再び寄せ來し浪に陸地高く打ち上げらるれば、見るゝ再度の浪に遠く取り去られけり。打ちまもれば花は彼方へ一度此方へ一度あちらこちらにさよひつ再び舊の磯邊に打ち上げられぬ。あはれ縁ありてわれ等が手に再び返らんのかと。取らんとすればあはれ方に幾度か弄れ搖られへて今度は沖の方へ引き去られわれ等が目には見へずなりぬ。夕ぐれのかげはやゝ深くなりて、山の端にはうすむらさきの霞たな引きて、海の面もうす暗く水天の境も分かずなれば、夕ぐれの鐘はばるかに花のゆくゑを追て大海の彼方に没しぬ。

水の流れと人の行末とは古よりのだとへなるが、われには今更の様に思はれて彼の花の一枝にわれはいと物狂はしく覺へぬ。われを忘れしもれは再びわれに返り、思に沈みかきみだしたる心地して宿取りし家に返り來つ。宿に歸ればまた人々の心にもなき愛矯造り、思もなき事などを言ひてわれ等を持てはやす。いたわしやへ一世には金殿に匂ふ櫻もあり、玉樓に咲ける牡丹もあるに、あはれこゝら渡りの野生の花、何に限らず、只造化の業の然からしむるのみ、彼れに瀆れたる罪あり何の咎ありてかかくはあさき命運に抱かれつゝ貴人めでらるゝ花あなたがちに貴からず、野末の花賤しきに限らず、只造化の業の然からしむるのみ、彼れに瀆れたる心あるか彼れの罪にはあらず、彼れに惡しき業あるかかれの知る處にあらず。善と惡とはあだなる名のみ果敢なき法のみ、彼れも花よ此れも人よ、何れ造化の好しと見給ふものにあらざらめ、世の聖の道を私して彼のあはれなる際のもの知らぬ人の心悪さよ。

定なきは人の世なり、はかなきは水の流なり、彼の花の一枝今は何處の淵に漂ふやらん、世にはあはれの外のあはれもあるものかな。

花ごもり

其一

一葉女

本郷の何處とやら、丸山か片町か、柳さくら垣根つゝきの物しづかなる處に、廣からねども清げに住なしたる宿あり。當主は瀬川與之助とて、こぞの秋山の手の去る法學校を卒業して、今は其處の出版部とやら編輯局とやらに、月給などほど成るらん、静かに青雲の曉をまづらしき身の上、五十を過ぎし母のあ近と、お新と呼ぶ從妹の與之助には六歳もどりにて十八ばかりにや、おさなきに二、親なくなりて哀れの身一つを此處にやしなはるゝ、此三人ぐらし成けり、筒井づゝの昔しもふるけれど、振わけ髪のおさなだちより馴れて、共に同胞なき身の睦ましさ一トしほなるに、お新はまして女子の身の浮世に交はる友も少なければ、與之助を兄の様に思ひて、心やすぐ嬉しき後ろだてと頼み、よし風ふかば吹け波たゞばたて與之様おはしますほどはと據りかゝれる心の憐れに可愛く、

此罪なく美つゝしき人をおきて、じさゝかも他處に移る心のあらんは我れながら宜からぬ業と、與之助が胸に思ふことあり、八歳の年より手鹽にかけたれば、我が親族にはあらねども近とても憎くはあらで、同じくは願ひのまゝに取むすびて、二人が嬉しき笑顔を見、二人が嬉しき素振を眺め、我れも嬉しき一人に成りて、すべての願ひ、望み、年來むねに描きし影を夢なりけりと断念、幾ほどのなき老らくの末を、斯くて此ま、やさしき妻々様に成りて送らばや、さらばお新が喜びは如何ばかりぞ、與之助とても我れをつらしとは思ふまじけれど、あはれ今一方の人の涙の床に起臥して、悲しき闇にさよふべきと思へば、ござれ恨みの懸かるべきは我れなり、天より降り來たりし如き幸福の眼のまゝに沸き出でたるを取らで、はかなき一筋の情に引かるれば、恨みは我れに残りて、得がたき幸福は天の何處にか行きざるべし、與之助の女々しく未練なるは弱年のならひ、見る目の花に迷ひて行末の慮なればなるを、これと同心に成りて我れさへに心よはくば、辛き浮世になりのぼる瀬なくして、をかしからぬ一生を塵の中いうだめかんのみ、親子夫婦むづましきを人間上乗

の樂しみと言ふは、外に求むることなく我れに足りたる人の
言の葉をかし、心は彼の岸をと願ひて中流に棹さす舟の。寄
しこしと定めて人を頼まぬ心だかさは、ふと聞きたるにこそ
尊どくもあれ、遂に何ごとを爲すべき場處も無くして、玉か
瓦か入見わけねば、うらみを骨に残して其の下に泣くたぐひ
もあり、今的心にいさゝか屑ぎよからずとも、小を捨てゝ大
につくは恥とすべきにも非ず、此ごろ名高き誰れ彼れの奥方
の縁にすがりて、今の位置をば得たりと聞ゆるもの多きに、こ
れを卑劣しきことゝ説るは説るものゝ心淺きにて、男一疋な
にほどの疵かはつかん、草がくれ奉をにぎる意氣地なさより
も、ふむべき爲のかけはしに便りて、そゝしく、たけく、榮
えある勳を浮世の舞臺にあらはすこと面白けれ、も新がこと
は瑣細なり、與之助が立身の機は一ト度うしなひて又の日の
量り難きに、我れはいさゝかも優しく脆ろく通常一とほりの
婦女氣を出だすべからず、年來馴れたる中のたがひに思ふ事
も同じく、瑕なき玉のいづれ不足もなき二人を、鬼とも成りて
引分る心は、何として嬉しかるべき。我れになしても思ひ
面かげまで、ありへと胸のうちに描かれぬ。

其二

伯母になりて、與之助が心の彼方に向ふべき様あつかふは我
が役なり、嬉しき迎ひは我が足もとまで來りけるものとぞ、
ち近は瑞雲の我が家の棟に棚引ける如き想像にかられて、八
字の髪に威嚴そなはる與之助が、黒ぬり馬車に榮華をほこる
順に勉強家の聞えさゝ有る子を持ちたるが上に、姪とはいへ
どこれも子にひとしきぢ新が、朝夕をいたわり仕へて、行々
は樂隱居さまの浦山しき身の上ながら、思ひあがれる心には、
此樂しみの如何ばかり少さん、とるに足らぬ事に覺えて、我
が腸より出でたる様にもなく、與之助が世間一通りの働き

をなしつゝ、世に抜けいでたる考へのあらぬさへ恨めしく、
望みは高くせよ、願ひは大きくせよ、落ちて流れて行水の泡
となるどる。天命なれば是非もなし、垣の瓢のぶらぶらとし
て卵の毛の先きの疵もつかで五十年の生涯を送りたりとて、
何ごとのあかしさか有るべき、一人の知らるべき事は百人に、
百人に知らるべき事は萬人の目の前に顯はして、不出来る
失敗も功名も手柄も、對手を多數に取りて晴れの場所にて爲
すぞよき。衆人の讀むべき書物をよみ、衆人のいふべき事を
いひ、衆人の行ひたるあとを踏んで、糸もて繰らるゝ木偶の
やうに、我が心といふるのなく、意氣地なくつまらなく、過
失もなく説りもなきは男の身として本意にては有るまじ。事
に臨みては母あうとも思ふべからず、家あうとも思ふべから
ず、取るべき道の重大なるに寄りて進み給へと、これは平常
の詞なりけり。

花にく露の戀とは何ぞ、をかしやと言ひ消すべきお近が、
與之助故に命とがるゝ人の、哀れ玉緒のたえだえなど、
取次きが言葉のかるしけなるを受けて、此頃の明け暮れ思ひ
を碎くに理由あり、花ちらす吹雪の風は此處に憂からねど、
き夢を見つゝ、與之助をば更らなり、我が内心に何者の住め
りとも知らず、母が懷中に乳房をさぐるが如き風情の、たち
まちにして驚き覺めたる時は、恨みに詞の極まりて、泣く
に涙る出でむるべし。さてお浮世は罪の世の中よな、汲むに
あまれる哀れの我が心一つよりこそ、愁ひの眉を笑みにかへ
て和風こゝに通ふの春色をも見らるべけれど、我が瀬川の家
の爲に、與之助が將來の爲に、時の運の我が親子を迎えるを
ぞかし。されどもお新はお新の運ありて、與之助に連れ添ふ
一生の嬉しき願ひはこゝに絶ゆるども、さるべき縁にしたが
がことを思ふべきに非ず、可愛しじとも、いからしとても、
振かへりて抱きあぐるは只暫時の心やりにて。遂ひに右左り
分つ袂の宿世なりけるを、我が一日の情は與之助に一日の未
練をなさせて。今一方の人に物思ひの數を添へつゝ、其一々親
ひて。さるべき幸福の廻ぐりも來たりぬべきに、我れはお新
がことを思ふべきに非ず、可愛しじとも、いからしとても、
一生の嬉しき願ひはこゝに絶ゆるども、さるべき縁にしたが
がことを思ふべきに非ず、可愛しじとも、いからしても、

嬉しき使ひは此戀にのりて來にけり。父は有名の某省次官の、家は内福の聞え高き、田原何某が愛女と傳たへたるにこそ。

移りゆく人の心に倣らばぬ花の、今を春と時しり顔にほゝ笑みそめし垣根の梅の一と枝ふた枝を折りて、お新はむつましまさらひの師のもとへ清書の直しを請はんとて、伯母にも與之助にも挨拶しとやかに出て行し後、輪にふく煙草のむすぼゝれたる思ひにち近は茶の間の火鉢をはなれて、三疊の小座敷に何の書物なるらん又机の上にくりひろげしまゝ。梅が香薫る窓の外をながめて讀むとも見えぬ與之助が傍に、炭がちの火のうそ寒き火鉢をかき起しつゝ、自から持ち來し座蒲團に悠然と坐をかまへて、物いひたき景色は、例の夫れなるべしと、聞かぬほどより五月蠅しの素振あらはるれば、與之助、汝はまだ子供のよう少し笑ひて身を進ませ、思案はまだまどまらぬかの、言ふは汝が胸一つにして、詞に否と應との二つなるのみなるを、何れにとも定めて、母が胸をも安めては呉れぬか、親とても差圖はなすまじき縁のことなれば無理にも、とではない。否ならば否にて、誰れに遠慮の入る

ねば、浮かべる雲の危きにのぼらんより、八重襷にさし入る月を肘まくらに眺め、我れ一人たのしくは夫れにて事の足りぬべしとならば、母もこれより其心に成りて、高きと願ひし今までを夢とあきらめ、一々間三間の借家を天地と定めて、洗ひすゝぎに、藍襷つゝくりに、老ひの眼かすむ六七十を、孫の守りして暮らさんも宜し。いかにや與之助、汝が胸はと静かなれども底に物ある母が詞の、ぢり／＼と肝にもさばれば、をかしき仰せ。どんと私しには呑こまませぬ、お手一つにて育だらる厚恩のなみならぬを知れば、及ばぬ心に鞭てもど。これは朝夕の願ひ。さりながら、内縁にすがりて舅の袖の下にかくれ、これを立身のかけはしなどは懸けても思ひ寄りませぬこと、未熟なれども我がことは我でなすべく。此綱なければ世に立たれぬかの様な、心配は御無用に御坐りますと決然こたゆれば、母は其顔をじつと眺めて、そればよなど歎息の聲をもらしぬ。

それは眞實か、さても若き了簡よな。さればこそ母が行末を

でもなければ、決然とひそかに宣せらうなもの。母は何れに好まにも非ず。まして田原の娘は逢しこともなく見し覺えも無きに、これに加擔人して是非にも嫁にと願ふ道理はなし。唯可愛く大事に行末までを築じて、明け暮れ胸を痛め思ひにやむは汝が其身一つぞや、父様はやく亡なり給ひしより、知れが如く親族とても悪臭に寄る春蠅の様に、追ふがうるをきほどの人々なれば力になる者とてもなく。あはれ思ひは雲井にまで昇れど、甲斐なき女の手に學士の稱號をも取らせかねて。猶すくなからぬ借財を身にまつはれる苦るしさ。かくて汝の行末をもるへば、嬉しき夢は見る夜すくなくして、睡りがたき宵々の老ては殊につらき物ぞよ。されば田原がごど、運は日に見えぬ處にありて、天の機は我々が心に量り難きに、年來ねがひたる念慮の叶ふぐき祥かと、母が拙なき胸に感じたればこそ言ふなれ、無理とは覺すな。もとより汝が爲を思ひてなれば嫌といほゞ夫れまで、人々の心々一つなら

まれの裏なれば、群雀の鳴りかしまして、垣のもとの諸聲は天まで届かず、雲をけり風にのる大鶴の、嬉しきは此委常普通の娘にて過ぎなば、前垂れ襷の縁をはなれず、井戸端に米やかしぐらん、勝手元に菜切庖丁や握るらん、さるを卑賤しき營業より昇りて、あの髭どのを少さき手の内に丸め奥方とさへ成り澄ませば、そしりは物のかげに隠れて名は公の席にも高く、田原夫人と並らべ書けるが、公侯伯子の誰夫人にも劣る事か、慈善會、音樂會、名は聞きながら見ること難き人さへ有るに、幹事とかや何とかや、それは未だ少さし、事ある時はおほけなき御前にも出るをぞ、これを我等が上に比らぶれば、空に流るゝ銀河と、つちに埋るゝ溝川との違ひあり、少さき貞婦孝女は遂に顯はるゝ事なくして、うき世の巾利は此たゞひの人なるぞや、なき人の上に批點もいかゞなれど、汝が心根に似たりける父様の、我れが我れがと思しめしは奇麗なりしが、人をも世をも一包みにする量なければ少さき節につながれて、我れと我が身を愚になしつゝ、夫れくちやんとしてのけられたり。

聞きて、膝にねみれる小猫をあろし、よみさしの繪入新聞を
この茶だんすの上にのせて、ち珍らしや何風に吹かれ給ひて
ぞ、谷中の道はち忘れなされしかと存じましたに、と障子の
内より美くしき聲をもらせば、西北か、但し南の、天氣豫報
にも見えたりし曇りの何處やらに出来て、肝癆にもやもや
雲が沸きたれば、ち辰様が扇の風にでも沸ひてほしく、ち宿
もとまで罷り出たる次第と例に似ぬ與之助がをかしき詞に、
ち辰座をたちて迎へながら、大分御機げんで御座んすの、梅
見のち歸途か、橋本あたりのち名残見えまする、さりとは
ち土産もなしに御不心中やと笑へば、それ處の勢ひかど、與
之助も笑ひて、さし出す友仙のふとんの素人めかぬを引寄せ
火ばちの向ひ合せに坐をしめれば、ほんにち顔色もよから
ず、御不快か、但しは例のねゝ様が我まゝからの肝癆に、母
様したゝか困らせ給ひて、ち足の向くまゝ此方角へち越しな
されしが、どの道うれしからぬち顔色と、圖ほしをひれて
其通りとも言ひかねけり。

はまだしも、先にも我が身が言ふ如く、遇はぬ浮世に何事の望みも捨てゝ。苦に雨きくたのしみを、茅が軒ばに味ひたれば、別に長閑けき月日ありて、夫れは又其筋に面白かるべけれど、かなしきは生にゐる人の事ぞかし、すき間もる風霜夜さむけく、薄き衣に妻子の可愛さしみへと身にしみれば、一日半夜やすらげき思ひはなく、身はけがれざる積りにて汚なき人の下に使はれ、僅かの月給に日雇にひとしき働きをして、長からぬ生涯を月もなく花もなく終り給ひしは汝どもと知れるが如し。されば汝が心根の清く尊く美くしく立派には聞えたれど、仕種は父様の二の舞にて、笑止や少とき結搗人にて終りやせん、と言はゞ堪へぬ心に腹もたつべし、母は汝が爲をちもへば、怒る、はらたつ、何の憚りはせぬぞや、よしや汝が望みの判事試験に、首尾よく及第して奏任のはしに列らなりたり共、田舎まはりに幾年を渡り、猶その上に種集むるほどの事は、保證の印のしかどもして、無しと言ふとぞ、限りある圓の中に、身は目に見えぬ繩につながれ、人の

女、切髪姿に被布の好みも何處やら洒落て、良くなき後の世渡りは昔し覺えの三昧も流石とはばかりて、月琴の師と聞くぞをかしき、お辰は長羅等に一服すひて與之助に手渡しまつ瀬川さま私しの言ふは當りましたる、よい加減になされませや。さもなくてさへ母様の御苦勞は山ほどなるに、よく年しての大供様が、毎くひ反らして甘ゆるは可愛けれど、すねるぢられる、何で御坐ります、お腹が立たば寝かしてお置きなされど片頬に笑みてたしなめれば、異見は眞平、ようく逃げのびて、此處で二の矢は御免蒙むりたし、理屈は捨てゝ陽氣におもしろく、我が平常は知り抜き給ふお辰様がヒ加減に、嬉しくをかしと思ふ話を聞かせ給へといへば、夫れは造作もなきこと、春をく堤の花よりも美く、秋てる中洲の月よりも清く歌舞の菩薩が手を盡くす物の音も及ばねば、お前様があ好きの書や歌や何の何の、見れば嬉しく、聞けば床しく、ちれる肝も悉皆おさまりて、思ひ出してさへ魂のふらつく様な事が御座んす、とは又何ぞと問へば、身邊の新聞をつきつけ、夫れ此處に、と指さすは新の字、これは解からぬこと禪僧が問答でもあるよなどと笑へば、お辰眞面目々、眞言の秘密で

御坐んすぞえ、其字を一ト目御覽じるよりお胸に現はれる影は可愛らしき島田醫にじやばらの結び下げ、兄様此字は何と読みますと御本を前にかしこまうしめ姿が見えます筈、何と無類にお嬉しかろうと、言ひ終りておぼへと笑へば、馬鹿なと一言くるじぎに笑ふ。

戯言は戯言、御新様といふ稚な馴染の可愛らしき方があれば他處にお心の散らぬは無理ならぬぞ、全軀あのお嬢をどうなさる覺しめしそや、初春の三日の歌がるたに、其うつくしき人と田原がことに話しの移れば、其話を今日は抜きにして貴ひたし。氣色のすぐれず頭のいたきに、ぶらうと家を出でたれど、そして面白き處もなければ、常に憂きことを知らず顔の、此宿には定めし胸のすぐ様な事もとて來たりける物を、らちめられては何の甲斐もなしと迷惑があれば、とうでも嬰兒様は猿蟹のはなしではなくはお氣に入らぬ。腹のすぐ様なとも氣の利たもので一口とくふ宿がらで無ければ、ねゝ様相應これで我まんなされませど、甘味にそくべかし出す茶の浮かすはお手のものと知るや知らずや。

翁のぞれごと

天 知

岩のうへに旅宿をすればいと寒し

おれらへ、こう吹きあらびたる空のたゞづまひ、亂れ飛ぶ雲

に稻妻をひらめきて木の葉の狂ひまはるるすさまじ。かゝ

るをかき知るや知らずや深山の苦むす清水に影うつす木の下

さびし庵ありけり、眉白き翁のあたりに構くべとうつらへ

とおねがるをまのむかがなり。

あたりよりふくよかかる御胸のはどう一しほゆかしくて、あ

はれ世に衣裳ほどあらかしきものなしと見ほれまじらする

に、やがて御聲きよらかに歌ひ給ふ

苦のこころもをわれにかせなん

何ぞ、うロナうロすみ給ふもなつかしげにて、つくへ御聲

を聞けば小町の媛なり、まことに浮世は岩ほに枕するさまな

るかな、あはれ岩ほの上に旅宿していと寒けしやと脚ち給ふ

は花の園生にまよわるイブの心ねにもや、これぞけに女子ど

とおめくこへらす、寝ごとひらめきておらめき出でるのあり、

物のけにもやと見れば竹の中よりうまれ出で給ひけん女性の

御姿なり、雪もけぬべきつやへしき御膚を惜しげもなく現

はし給ふて、つやはづかしき御けばひもなう獨りこゝろよけ

なり、天魔の吐き出すとも見ゆる雲のちぎれを見あげ給ふて

ひらめく光りに蒼くおもてを射さしめながらほゝえみてすべ

と立給ふ御姿いみじや、黒髪のはらへと玉の御腕に軽くか

しれるさまほのめく煙りにも似て、クリシアの女神ならずば

浴泉の御かみにもやとじとこうへし、ろうたげなる御目のえみの蓮波ほゝのあたりに立ちそめぬ、しのびやかに樂りの

風調は、この一瞬時に特に著るしく、或る靈韻は彼の一瞬時
に特に顯はるゝことあるべし。刻々去るところのこのイシ
アンツショソを追ひて。馳するが如きタイフの上に立つ。燃
ゆるが如く湧くが如き。このニーベルリングの激浪ハリマツ
とこらこれ我等が理想境なり。彼の佛家に悟道ハラヒ。西教
に信仰ハラヒ。みなこれこの道途を経て。或る他の翻滾なる
理想境に到らむとするなり。我等が道途はすなはちこれ我等
が理想境なり。朝露の如き生命を以て、この變轉極りなき人
生の劇中に立ち、誰かその潮流の最も急なるものを捉へ、そ
の靈韻の最も高きものを捉へ、その色彩の最も美なるものを
捉へ。その靈光の最も輝けるものを捉えるもの也。

眞珠の爐中に燃ゆるが如く、我心常に絶えざる活火を燃やさむ。螢火の草澤に飛ぶが如く、我心常に闇に迷はむ。彼の信仰といひ、悟道といひ、一步を静寂の境につけたるもの。これ既に人生に敗れたるにあらずとせむ。こゝろみに巖頭に立つ。幽花の姿といひ、断雲の影といひ、名手の塑像といひ。

花
ご
も
り

卷之三

1

卷之三

我れながら解しがたき心のいつ方に向ひてすゞむらん、あと
にも先にも今日までに逢ひみしは初春の三日、年始ばかりの
屠蘇の醉ひ、田もとにあらはれて心は夢ところげこみし谷中
のやどに、うつくし人の寄り合ひて今宵は歌留多の催し。お
迎ひの使ひをもあげたかりしに、ようこそその御入來と喜こば
れて。若きものゝならひ與之助いやならぬ心地のして、遂ひ
そのまゝにち中間入りの源平合戦、組わけの三たびが三たび
連れになりしは辰巳門下に隨一のち家がら、甥の田原どの
が愛子にち廣さまとて、父さま似の色は白からねど、娘さか
りは山茶も出ばなの色さかく、派手おほやかの母様があ好みとあ
りて、模様もやる花やきたる薄藤の中振袖、もれてぞにほふ八ッ口
の綿ぢりあん。人目をうばふ織ものに、帶は繡珍か夏雄の影
うのばちんの金具は瀧に鯉、はつきりとせし氣象はとりなり
活潑かつとももしろく、勝ちての喜び、よけての腹たち、我まゝ

絶人の面影をひひ。活々流れて我心に觸れるなし。刹々活
るもの。これ日暮れると早く臥床にかくるゝの徒なう。
なんどヨーローのいひけむ如く、我等死の境より放たれて、
暫くこの生に漂ふる。あと來し歳はからむことそれ何れ
の時なるを知らず。こゝにかねばなんど亦一轉瞬の間に過ぎ
ず。嗚呼誰かこの間一髪の機に處するものぞ。或るものは祭
壇の影に眠り、或るものは破窓の塵に紅涙を撒きて、或るる
のは柳影にゆく河の流れを廻る。わもわらばあれ、あらゆる
活火を燃えしめ、閃かしめ、あらゆる血涙を沸えしめ、涙が
しめ。あらゆる情熱と瞬時にかき起して、こゝに天地の悲痛
にもだえ。こゝに人間の悲哀にたゞよひ。身を躍らして直に
無限の淵にしつぶむ。これなんどかこの一髪の機に處するもの
にあらすや。嗚呼何者か我心地をかきたてゝ、かゝる情焰
を燃やすものぞ、かゝる血涙を湧かすものぞ。宗教か、あら
ア。哲學か。あらず。我等は浦脇の血潮をかき亂して、我半
生の幽思を紅にまみれしめて、我を蔽ふ我牢獄の白壁を染め
むかすやなり。これはこれ詩歌美術の幻境にむかひや。

ねやら、我れもわからぬ了簡にて谷中の扉をたゞきは

行末は八重の沙路に大船うかべて、空や波なる青海原とて、源は山路の苦のつゆ、さてもわらなしのあ弱年よしわどいたらむ目とに何見えざらん、問はねどしるき銀之助が心の宇宙、に迷ふ有さまへで夫れと呑みこめば、思ひしにはかはうてお辰さのみ田原がこそも語らず、案したるよりは産むの安きもてなし。恐れよりつかさうし日ごろの馬鹿らしさ我れを笑はれて、母が前にあこりたる疳瘡の雲るやうやう散じれば、おのづから詞に花も咲きて聲だかに笑をやうたらなれば、時分をばかりてお辰のう瀬川さま、人は何時とのやうな事で苦勞するやら知れませぬ物、うき世と切り髪の今日この頃、我が身にかゝる浮雲うきそ大方は拂ひつくして、心の月のたかく澄むやうにと願ひながら、さて左様もならぬもの。見さくにつけて人の哀れとぞ知らぬ顔して過ぐされねば、醉狂らしき心配に身さへやせて、一人やあるかと氣はるめども、肝腎の御本尊さまがいたちの道きりでは困るでは御座んせぬかと恨らまれて與之助、それはお氣のせんがかり輕へあまゆ言葉も出かねて、左様ひよふ次第ではなしなどと言譯をなしける、お辰ひよ眞面目に、弟子は子もらなじなれば我が身も

可愛きあのち娘の爲、早くうちのあかせましたけれど、それ

は一筋、お前おまのお情實る汲みぬでは御座んせぬ。まゝぞその昔しより別れて今ではお前おまが一人をたよりの、お新おひな可哀かわいしだあるは御尤、さひ譯わけあそばすほどが可怪しく、左様あつてこそ嬉しきお心を喜んで居ります。なれども田原さまが事とて彼のまゝでは置かれもすまない。我れさへよくは他人は勝手と其やうな無茶は平常の御氣質おきしつとお言ひに

なる譯が無ければ、もうでも一道にまよひて御苦勞なさるのを御座おざりましよ。おのづから母様には仰せ憎くまこと私には御遠慮の入らぬ筈なれば、何だととも打あげなされて御相談下さうませやと、おなな子に飯粒めんりくゝあるやうな申分を、さすが亂暴に狼藉に言ひやぶらるゝ物でなければ、與之助少し勝手のかばりて、おぼらくは默然だらうとなりぬ

次第に我が本陣ほんぢんへきりこまれて、いつれにか返答せねばならぬ様になれば、ひつまで腹のまねる出来ねば思ひきりて與之助、我れはお辰さまが何時いつの給ふねと様なれば、其やうな義理はうの六むつかしきことは知らず、絆とやら通とやら舊なかせし末の人こそ與るかきらるひやうは有るもの。何となりとも察してよき様に計らひ給へ、我れは小豆あずきまくらが相應なり

ればと、美事とほけた積りで答れば、ほんに左様で御座んしたもの、海山三千年の我れに比らべて力まけのせし可笑し、知らざるを知らずとせよる生意氣らしけれど、ね々様の小瘤こぼだては入らぬ事なれば、以來は何事も我が身にまかせてお小言は仰せられますなやと言へば、萬事よろしくお差圖さとを、與之助はどこまで申譲のつるり成りしが

其六

その次の日お辰田原とのに車を飛ばせて何事を言上しけん、奥方の笑眉ひらけて見えさせられしが、蹠るとそのまゝ、呼出しに人の魂をふらつかせし昔しより、書きなれたる長文の滯るところなく、我れながらをかしさを水入れの水にそゝひで、する墨のあをこまやかに、筋は立派に萬歳を祝して、まゝ、のふは與之助さよも入り嬉しく、然るべく取はからゞと仰せの有りけるまゝ、唯今例のに參りて、奥方おとこまで委細申上げねるに、お喜びのほどは去る方に推し給へ、猶この後のまゝまに付きて、お打合せいたしました事の多ければ、みづから参館さんかんで、とはあるいざ少しだすこはる事のありて、今日明日自由のきかねば、おほこびの願ひねがひしたまよしをあ近のるどま

で申ちくりける、此文を受とりたるお近が喜びより、あされはてし與之助が、あまりの事に戸惑ふと思はれず、さうぞて青筋たてゝ怒りもせば、ひょ／＼笑はれて茶にされて、我が言條は何所にか立たすべき、母はもとより同意も同意、望みに望む所なれば、我がもしも嫌やなどと言はゞ、お辰と同盟してどのやうの難義むずかしさと言ひ出すやる計られず、彼方より此方こちらよりあぐゑ／＼と面倒を持ちこなれて、長く苦境に身を置かんより、今後のこととは今後の處しかたも有るものと、せん方なしの断念だんねん、お辰がひよお嬰兒えいじさまの本色が、うまうま深淵に引入れられしをくやみながら、手玉てだまに取られ、手も足も出ぬやうに成りぬ

お近はもと／＼お辰とは意氣の合ふとも中にも非らず、亡きて通ふとも／＼苦々敷つらづらひけるも、此度びのはからひの如何いかきと我が手にさへ乗らざりしを鎮づめて、うれしき順序のはこびける喜ばよしさん、お新のことをさへ打あけて談合するやうに成りける、狹き家のうちの出来ごとを、かくしたるとも途ひには知れずにも居まじく、知りたりとて故障のあらではなけれど、氣きづき思ひおもひをさせるだけが厭やなれば、

あまただちたる事の整はざるさまに、何とか宣き手段もあらば、お新が爲の後來もわるからぬやう、人の妻にとひては未だ與之助が事情をしるまじき彼の娘が、應とはかならず言ふまじければ、行義見ならひもをかしけれど、何とか名をつけて華族がたの大奥にでも一時の御奉公にいだすか、ともかくも一二年のほど家をはなしたらば、双方に恋れ章のつゝるゝ種にもなりて、其後に聲をとるなり嫁にやるなり、無關係の人にならば事の易かるべしと、此やうの話をなしける。その中に與之助、此場合になりて我が身の方はゆるぎの取れ白事なるを知りつゝ、あかず惜しき心の十分に殘れば、取どめて我がものにの念は今さら出すべきにもあらねど、何心なく罪なき人を、寄り集りて術計のうちに落しられる如きを憐れめど、我が囂をはさみたならば开處を怪しくぞられて、よいかよ新を邪魔ものにさるゝ種ならんも知れねば、何事にまればなしの始まうじ、よいかよ時に臨まば、お新をつゝきて當入より厭やと言はする外に道はなし、お新の厭やとかがりを振りなば、誰れも無理にとは言ひ難きに、我れも共に詞をして理屈をつくり、おぼしの時日を延ばすほどには、天に風雨の變あるどもなじく、はからぬ處よりはからぬ事も出で

種にもなりて、其後に妻をとるなり嫁にやるなり、無闇怪
の人にならば事の易かるべしと。此やうの話をなしける。そ
の中に與之助、此場合になりて我が身の方はゆるぎの取れぬ
事なるを知りつゝ、あかず惜しき心の十分に殘れば、取どめ
て我がものにの念は今さら出すべきにもあらぬと。何心なく
罪なき人を、寄り集りて術計じゅつけいのうちに落し入れる如きを憐れ
めど、我が嘴をはさみたならば开處を怪しくとられて、いよい
よお新を邪魔じゃまするにたゞるゝ種ならんも知れねば。何事にまれ
はなしの始まりて、いきどゝる時に臨まば、お新をつゝきて
當人より厭やを言はする外に道はなし。お新の厭やとかおひ
を振りなば、誰れも無理にとは言ひ難きに。費れる共に詞を
そて理屈をつくり、吉ぼしの時日を延ばすほぞには、天に
風雨の變あるどもなどく、はからぬ處よりはからぬ事も出で

卷之三

来るものなれば、今までの事の田茶になりて、田原が事の彼方より破れて來たらぬとも言ひ難いなどと、人は厭ふ破綻を
心に覺えて願ひて、我が心にも非ずほじよりたる縁なれば、
萬々御談のやうに誠しからず。今日の我自身の成りゆきの夢
のやうなるに、さつきは覺めて氣樂に愉快の舊にかへり。あ
辰。田原などへらふ文字の體裏とはなれで、大川足尾を駆ひ
たるほど。ものばうと爲したあるのよと思ひて、生憎やお新
が表れらからしの様なる無邪氣の體子なり。我れをひらめか
る見よげにとの親切より、衣類の洗ひそゝを扱は縫はうの體
なく。夢にも母子が心をひととしたらば斯くはなむかとも観た
のやせしも。其身の爲には鬼にも似たりける伯母と、娘らは
心の介抱なほぢうならず。今日は谷中を行きて足の波かね
り(?)は。少しゆれぬや致しなよと取つて置けど、常に何
の問題はかづんじてお田に映りて、何ともこぼれの匂ひの
氣もちの爲しける

口ふたの見當りぬ、一つはあ辰の手より出で、霞が關にさる名高き齋諸侯の奥づとめ、むかしと違ひて御質素との表面なれど、衣類もち物の支度なみ／＼の嫁入りよりは仰山なれば、御奉公人とても小商人小官吏などの娘小供はなく、よしある娘さまがたの上の方を見習ひにち上り遊ばすなれば、お行儀はもどより、志しがあらば諸藝に通じる事なりて、三年五年の後にはやさしき身代に及ぶまじき拜領ものもありて、ようづ富貴に結構なるち邸とのこと。一つは瀬川が齋知己に折々は出入りも爲したりし黒澤向がしと呼ぶち畫師との、浮世に大家名流の聞えも無けれど、斯道にあつき志しは却りて其

を、今さら一人はやりともなきに。我まゝなれども此處より
一人手廻りの婢うぢをつれたく、お新さまを宜き口あらばとも頼
みなりしが、あのやうに可愛くしかも柔順じゆゆしき娘を。我が子
同様に伴ひもしたらば、畫ごゝろもなき我が山すみの憂さる
慰むべく、萬事に嬉しき連れなるべけれど、良人にしたがふ
我れさへさのみ進みては行きどもなき山の中へ、花の都を捨
て、若き人の行かんともいはれまじく、又よき御奉公をと望
まるゝに貧乏畫師がち預かり申たしとは口巾たくてお願ひる
申されねばと、壁訴訟のやうに妻なる人の來て語りたる、此
二つが此頃の題に成りけり

る隠居として、家をゆづりし息子の律義なるにかへり見る
煩はしさもなければ、先祖が生國とさへ甲斐の差手に、磯千
鳥君が千代をば入千代となく景色さぐりがてら、厭氣の出づ
るまで彼のあたりの山家にまばし引こもらんといふ。妻は此
地に育だちたる人なれば、話しがたきもなき山猿の中に這入
りて、さぞ淋しからん月日を思へば、ひつぞ家にどよりて
お歸りを待つ方がよしとも思へど、年ごろ壁ましき中は月花
のひづくにも手を携へぬ時なく、寸の間もはなれざりしもの

がかし、怪しき事にちよひて、俄かに承知はなすまじと思ひたるに。お新女ののみは驚ろきのせや、思ひもうけたる如く出で、行くべきよしを合點しける。與之助かげに廻りて心を引き見れば、それは伯母さま兄さまのや傍わきにいつまでも暮らさるゝ物ならば夫れに上こす喜びはなけれど、左様あられぬが世のならひと聞けば、これも詮なきこと。うき世うきよどもふるの力はいかほどの物やら目には見えぬど、かなしきる嬉しきも我が手業にあたはぬこと、あきらめぬる身は、愁らき時は

つらき時の來たりぬと思ひ、嬉しき時は嬉しき時と呼む。そのほかには何とも爲れぬでは御座うませぬか。と思ひき。

立派にうつくしき奥づどめの。さうは同じ奉公をうへどせよ遊ぶにひとしき多人數の中にはじて、絹布づくめを務めらるゝ華族の奉公ならば、その身の爲の行末もよく。世間の聞えも宜かるべきに。お新はいかにと問へば、お命令ならば是非がなけれど私しに選ばして給はらば華族さんは厭やといふ。さては黒澤の方がよしどか。我意に氣樂なるには相違なけれど、行々の事につきて何ほど頼るしき宿でもなく、それも東京にでも居ることならば氣やすすに任かせて。おどり奉公など、いふでは無く奥様に細工ものでも習ふ了簡にて行くも宜けれど、今が今田舎へこもうて、さて白雲の雲水も同様なる彼の人々につきて何處まで行かるべき。されば、方よりも遠慮して欲しどは明白に言はねばとなるを。何故に又妙な處をも望むるのかなどいへば、黒澤さんはお書脚では御座りませぬか、兄さんもお書はる好きなるに。私しは書が學びたう御座ります。書をならひて如何するつるうそと又問へば、懸しき時にう姿をかきても懸さうられまする事故

の内

流水日記 (一)

孤蝶

葉月二拾七日 友の旅路にある者より、書を寄せ来りぬ。沈みがちなる此頃のたつきに、善あなぐあるのよすがを得つと、急き開きて読み行けば、こゝも亦秋の村時雨の宿りか、彼も亦涙の人となりぬ。かの日の日、露けあおちとの宿をもまとひ出て、山家のまなきに匂ふ哀れの花の姿を憐れみてより、獨りゲーテが沈痛なる詩句をば誦して、日々らしく暮れ行く湖上の暮景を送り、孤燈をかゝげては西上人が面影に涙を滴ぐ此ごろのやるせなき思ひを唱つなりけり。あゝ、彼も遂に免れ得たりき、あゝ、彼も亦熱ある病に犯されけむ。彼は冷性の人と思ひしに、流水心なきも落花之れに浮び、露冷かなれども清月之れに宿る。彼も人なり、心理にひそむ絃線に、今や何物が觸れて、かくはかすかなる哀れの音色をや出すらん。彼は謹厚の士なり、慎重の人なり。何んぞ、彼の世上の漂蕪浮薄の児が舞に傲ふるものならむや、憐む可きは彼が情緒の亂れにして、悲む可きは、彼が心理の懊惱なり。懸はかま

はれて、與之助あとは聞くことの出来ず、一人胸のうちを泣きける。

かくも事の決定ぬる後は猶豫もなく支度のとへりひと、一日黒澤が出立の近づきぬと告ぐるに、田原が方は何ぞひと田だが胸にはひやへとする事の無きだらあらねば。これは一日もはやくたへせたき思ひ、かゝる時は是非無差別の日のかけに身近が念慮の勝をしめて、じよ／＼明日のあけの一晩に、上野發の涼車にてとゞら一段に成りぬ。お新は何ごとを思ふらん。言はぬともひは入しるによしなけれど、一語えてる意味の有りける詞の與之助には利き刃にてるべらるゝやうに胸のくるしく、寝られぬ夜半の殘燈のかげ薄れゆくまゝだ。やがては鳥もなくらん。かれも驚かすべし、うきと廻居をまたぐ時、涼車の笛の音ひとく時、やう／＼烟りにかけ消えゆくとき、かならんと思ひやる與之助よ。もし手が磯に千島を友として、かなしき戀のちもかげを捕くらん。不憫やお新が心付かねど、聞く人の心には激しく響く折りも多かるべし。嗚呼友を誤りしるのは、ひと不注意なる我此の心ならき。直ちに筆取りて、友の許に慰めの書を書き送りぬ。

廿九日 友の上も心にかゝれば、我主人の君に三日の暇を乞ひ得て、友を迎へんが爲めに、京を出でぬ。彼方に行着きしは、日もひと高きほどのりき。谷水の流れ、松風の音も、過ぎにし年にかわらぬ。今は白百合の花は枯れたり、かたみの橋の姿もさびしき月の夕暮に、落ち来る灘の白糸を眺め、去りにし面影を心に浮べて。只管に沈む我心の悲を。知るや知らずや。少女等の笑ひ興する罪なきさま。何となくひとしほ哀れに覺へて、夜も更け行くまゝに、ふしこと入れど、あやにくに。谷川の響、人の聲など耳に入りて、夢も得結ば